

13. 和束町大杉古墳出土埴輪の再検討

吉永 健人

はじめに

大杉古墳は和束町大杉に所在する古墳で、人物埴輪とそれに付属する可能性のある大刀形の埴輪（以下、人物埴輪付属大刀¹⁾）が出土した。墳丘はすでに失われ、他の遺物も見つかっていないため、これらの形象埴輪が大杉古墳を考える上での唯一の検討材料といえる。今回、和束町史編さん事業の一環で、これら資料を改めて調査し、観察・図化することができた。本稿ではその成果を報告し、若干の知見を述べたい。

1. 大杉古墳の位置と周辺の古墳

大杉古墳が所在する和束町は京都府南東部の相楽郡に位置する。和束川が南西方向に流れ、その流域を中心に和束盆地が形成される。和束町で確認されている古墳の多くは、この和束川の流域を中心に築かれている。本稿で報告する大杉古墳は、和束川左岸、東側に広がる丘陵の麓付近に築造されている。近辺には三本柿ノ塚古墳、二本一古墳が築かれており、いずれも現在は消失してしまっているが、前者は5世紀後葉（樋口1961）、後者は6世紀前半から後葉（菱田ほか2021）という年代が与えられている。また丘陵上には全長約40mの前方後円墳とされるお墓山古墳の存在が知られる。右岸側には、園大塚古墳・原山古墳・福塚古墳が築造されている。園大塚古墳は消失してしまいその詳細は不明だが、原山古墳は四獣鏡、衝角付冑、短甲等の出土資料から5世紀後半のものと考えられ、福塚古墳は6世紀前半ごろの全長約25mの円墳と考えられている（京都府立大学文学部考古学研究室2020、鈴木ほか2021）。和束中部の右岸側には安積親王墓に治定されている太鼓山古墳が築かれている。和束西部の左岸側には坂尻古墳群と湯谷ノ原古墳が確認されている。2基の横穴式石室墳からなる坂尻古墳群は、石室の特徴から6世紀中葉ごろに位置づけられ（京都府立大学文学部考古学研究室2021・2022）、湯谷ノ原古墳は、かつて石棺が出土したと伝わる古墳で、本書第Ⅲ部第12章で測量調査成果を報告しているのでそちらを参照されたい。

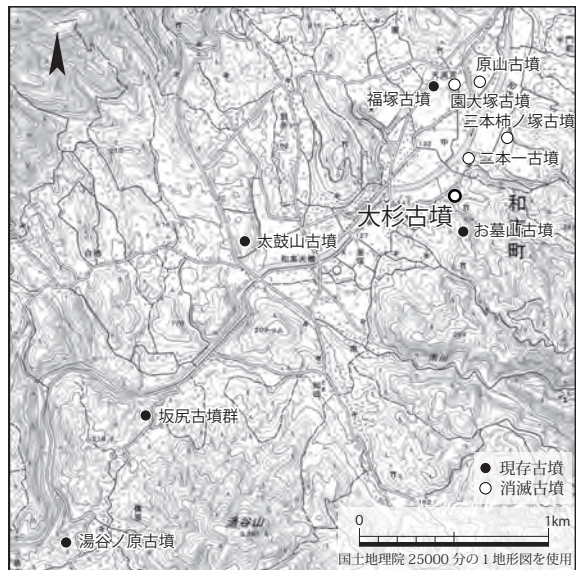


図1 大杉古墳の位置と周辺の古墳 (S=1/40000)



写真1 埴輪が出土した貯蔵穴



写真2 発見当時の埴輪

2. 資料の経歴と既往の研究

(1) 発見当時の状況

本調査にあたって、和束町史編さん室が保管する文化財発見に関する行政文書を確認したところ、大杉古墳発見当時の状況をより詳細に知ることができた²⁾。以下にその内容をまとめる。

今回の調査対象である埴輪は、1983年（昭和58）に和束町大杉で不時発見されたものであり、この時初めて「大杉古墳」の存在が明らかとなった。文化庁に提出された遺跡発見の通知書によると、同年11月27日、個人宅にて貯蔵穴を掘削中に埴輪が出土し、遺跡を発見したという。また、遺跡の現状として「すでに削平されて宅地化されている」と記載されており、埴輪発見の時点で古墳はすでに消失していたことがわかる。発見されたのは「人物埴輪片 大型1片（顔 胸部） 小型3片」の計4片で、「大型1片」が人物埴輪、「小型3片」が人物埴輪付属大刀に該当する。なお、今回確認した関連資料の中には、発見当時の様子を撮影した写真が含まれており、貯蔵穴や埴輪の状況を知ることができた（写真1・2）。その後、出土した埴輪については発見した個人宅で預かるよう届け出がされている。

以上が大杉古墳発見のいきさつである。これまで住宅建築による破壊で不時発見されたと認識されてきたが（小池1994）、上述のように、発見時点ですでに古墳は削平されていたことが判明した。なお現在は、3片に破損していた人物埴輪付属大刀は接合され、人物埴輪とともに個人宅保管となっている。

(2) 既往の研究

当資料については1994年に小池寛氏が報告をおこなっている（小池1994）。小池氏は、人物埴輪および人物埴輪付属大刀について形態・技法的特徴を整理し、類例との比較から所属時期を提示した。とりわけ人物埴輪付属大刀については、埴輪のみならず、モデルとなった刀剣資料についても検討をおこない、木製の柄装具・鞘装具を模したものであると指摘した。その製作年代については、類例となる奈良県森本12号墳出土の人物埴輪付属大刀との型式学的比較から「5世紀後半以降には下がる時期」に比定している。

また、昨年度には当資料に対し、3Dスキャンおよび三次元写真計測（SfM/MVS）がおこなわれ、その成果が報告されている（初村2022、仲林・溝口2022）。

3. 埴輪の検討

本調査では、昨年度写真計測によって作成された三次元モデルから出力したオルソ画像を下図にしたうえで、実物資料を実見しながら実測図を作成した。以下ではその成果をもとに、形態的・技法的特徴を整理しつつ検討を加える。

(1) 人物と大刀の関係について

大杉古墳で出土した人物埴輪と人物埴輪付属大刀が本来同一個体として製作されていたかについては、人物埴輪の胸から下が大きく欠損していることもあって判断が困難な状況にある。ただし、胎土や焼成の特徴からみても両者は類似性が高く、もともと同一個体として製作されていた蓋然性が高い。もちろん同じ製作集団のもので製作されたとしても別個体のものである可能性もあるが、写真1でみるように限られた狭い範囲のなかで相伴している状況に鑑みれば、両者は互いに近い関係にあったことが想定できるだろう。以下では別個体である可能性も念頭に置きつつも、同一個体である可能性が高いものとして検討をすすめる。

(2) 人物埴輪 (図2)

頭部から胸部付近までが残存する。現存高は25.6cm。全体的に良く焼き締まっており、橙色やにぶい橙色を呈する。

頭頂部 頭頂部は非常に平滑に仕上げられている。頭頂部中央には孔が空いているが、これは焼成前の穿孔であることが観察により分かった。さらにその穿孔工程としては、いちど頭頂部を塞いだ後に外からくり抜くように空けるのではなく、頭部を下から順に形成していき、最後に中央だけ塞がずに空けておく、といった工程が推測できる。この孔の意味は判然としないが、ほかの例をみれば頭頂部は塞がずにその上に頭髪やかぶり物を表現することがしばしば確認できる。平滑な頭頂部には赤彩が認められ、外面は不定方向のハケで調整する。

頭部 外面は剥離している部分が多いが、不定方向のハケが施され、内面はヨコナデが施される。左目下部から鼻下にかけて赤彩が認められる。

目と口は刀子状の工具で杏仁形にくり抜いている。鼻は逆T字状に粘土を付加して形成しており、鼻孔は認められない。左目下部付近には赤彩が残る。また、本来耳を表現していたのかは不明だが、穿孔による耳孔表現はない。

前頭部は粘土が横方向に広く剥離している。その剥離状況からみて、鉢巻き状もしくは冠状の衣装を頭部に表現していた可能性がある。両頬から両側頭部についても粘土が剥離しているが、薄く貼り付けた粘土が前方に向かって伸びていく様子が左側頭部から看取できることから、正面に流れる美豆良を表現していた可能性がある。後頭部中央付近も同じく粘土が剥離しているが、両側頭部から後頭部中央にかけてのスペースは剥離している様子はなく、非常に平滑に仕上げられ、周囲よりも一段低くなるよう丁寧にユビナデされている。このように前頭部・両頬・後頭部それぞれに粘土を貼り付けて何かを表現していた可能性が高いが、これらの表現を一体のものとして捉えれば、眉庇（前頭部）、頬当（頬）、鋤（後頭部）を有した冑として捉えることも可能である。

頸部 また現状では、口から首にかけても粘土が剥離し、顎のない状態になっているが、もともとは粘土を付加して立体的な顎の表現があった可能性が指摘できる。その頸部の剥離面に

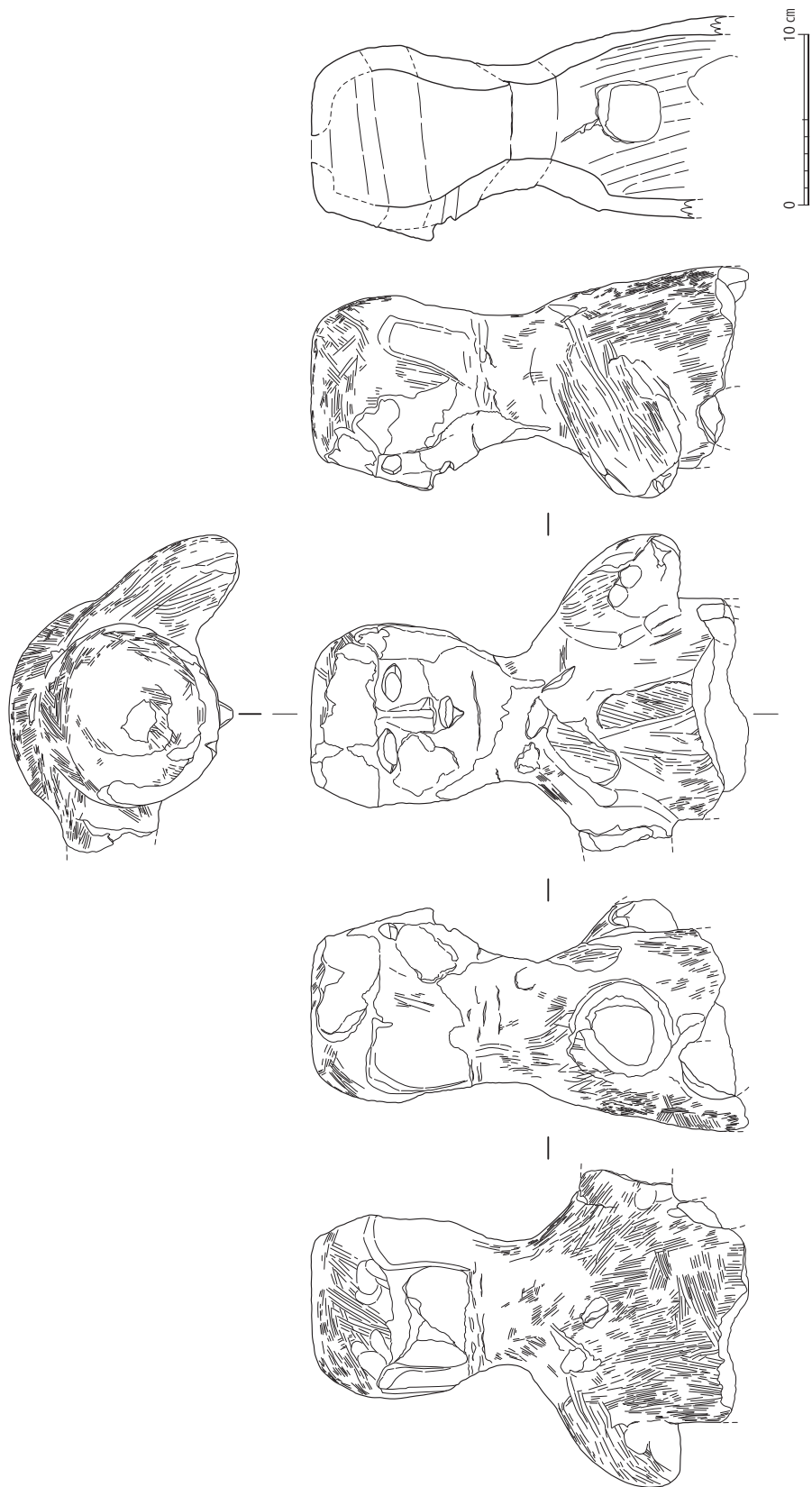


図2 大杉古墳出土人物埴輪 (S=1/4)

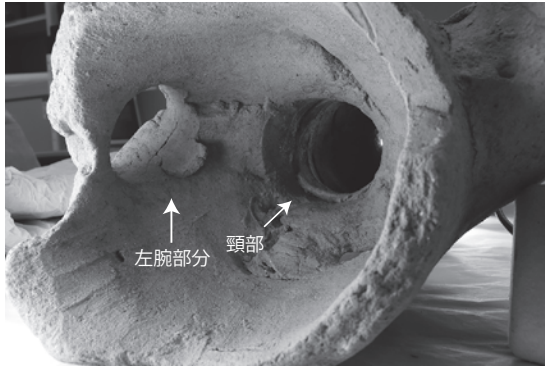


写真3 頸部・腕部の製作技法

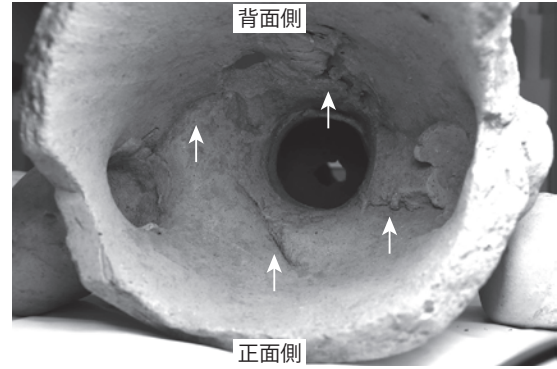


写真4 胴部内面の粘土とじ合わせ (矢印部分)

は粘土接合痕が明瞭に露出しているが、これは正面だけでなく、側面、背面でも同様に露出しており、このラインで頭部と体部の接合がなされたと考えられる。内面を観察すれば体部側の頸部に頭部側の頸部を挿入したような様子が見て取れるが(写真3)、別で作った頭部を体部側の頸部に挿入した場合、接合部内面への調整は物理的に不可能になる。しかし該当部分の内面を観察すれば、少なからずナデによって調整がおこなわれているため、その方法は首肯しがたく、別で作ったとしても、頭頂部側がある程度開口した状態で頭部の挿入がおこなわれたと考えられる。

胴部 胸から上が残る。外面調整はタテハケを基調とする。正面胸部には一部粘土が剥離したような痕跡があり、その剥離面にはタテハケが周囲の粘土に潜るような形で露出していることから、1次調整タテハケ後に、何かを貼り付けて衣装表現をしていた可能性がある。

背面は比較的良好な状態で残っているが、中央やや上部付近に不自然に欠損している箇所があり、鞆などの付属品が取り付けいていた可能性がある。

両脇下にはややいびつな円形の透孔が穿たれている。

残存下半部は粘土紐の輪積みによって胴部を形成していたと考えられ、内面に規則的な縦方向の指ナデが認められる。それより上の内面には、正面・背面・左右側面の4箇所において大きめの粘土板をとじ合わせているような痕跡が認められる(写真4)。現状では具体的な製作技法を復元することはできないが、腕部や頭部との接続に規制された製作技法と考えられる。

腕部 右腕は肩から先が欠損し、左腕は肘から先が欠損する。内面をみると胴部に腕を差し込むようにして接合しており(写真3)、どちらも中空で製作されている。また左腕は、肘部分で一旦粘土を絞り込み、そこから体の中心側に腕の方向を変えているため外面調整は腕の方向に沿うようにハケ調整をおこなう。

(3) 人物埴輪付属大刀(図3)

ほぼ全形が完存する。現存長16.6cm。

把 把頭小口面は円形を呈し、把頭から把間にかけては一方を湾曲させ、もう一方をほぼ直線的に成形する。把間には斜め方向の線刻が8本認められ、これは小池氏が指摘しているように、金銅線や糸、革布などを巻いた表現として捉えられる。また、把頭付近には赤彩が認められる。

鞘(刀身) 鞘(刀身)部分については、一方の面(図3-D)が著しく歪んで平坦面をなしていることから、この面が人物埴輪に接着していた面であり、すなわちその反対の面(図3

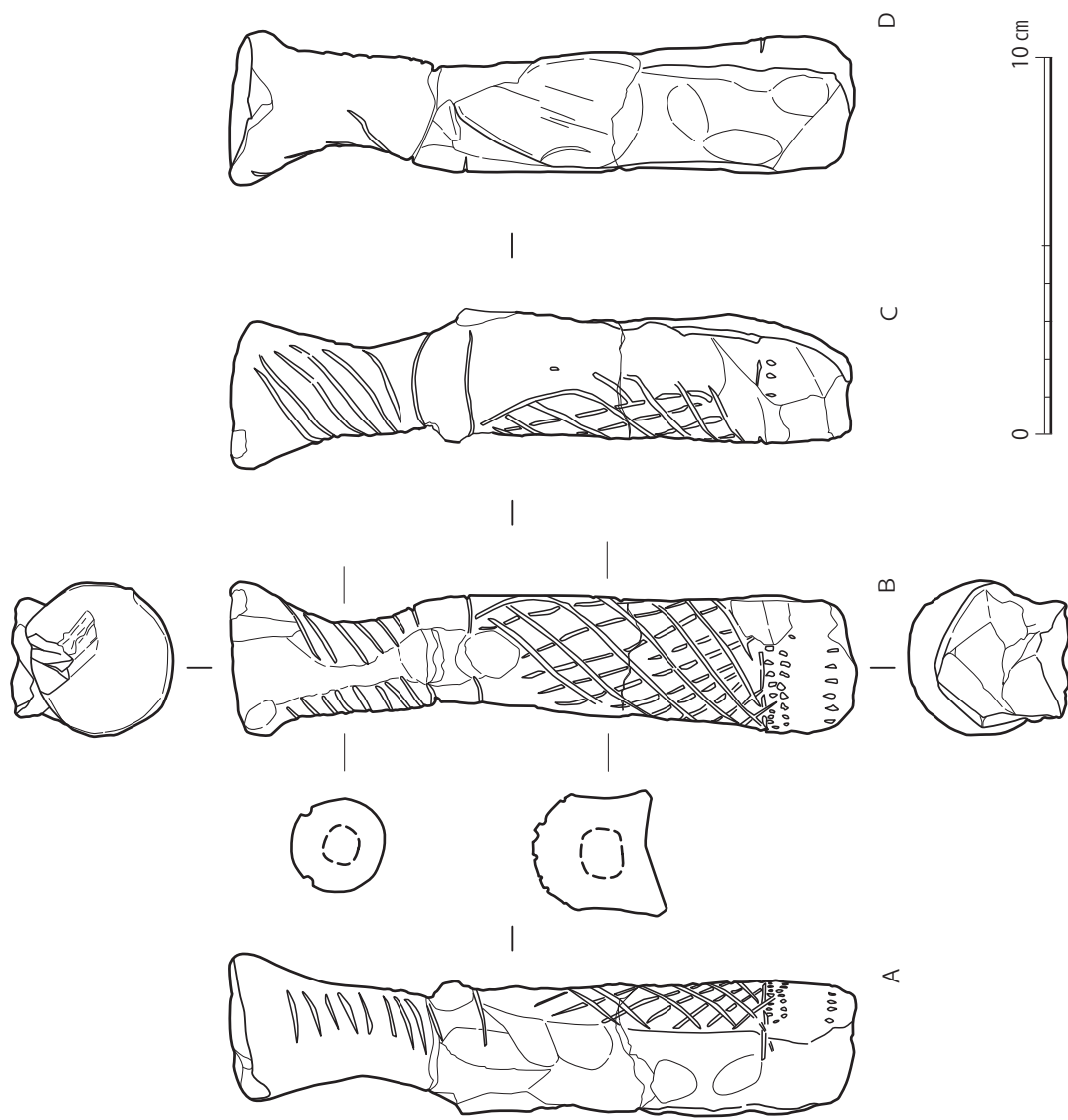


图3 大杉古墳出土人物埴輪付属大刀 (S=1/2)

ーB) が佩表であることが推定できる。

刀身と把の境目は2本の線刻で区画される。また佩表側の鞘口には粘土剥離痕が認められ、同一面の把間部分についても、その部分には斜線による線刻がないことから、この部分に護拳帯が表現されていたと考えられる³⁾。鞘部には7×11本の斜線によって格子文が表現され、1本の直線で画された鞘尻には3列の列点文が表現される。これらについて、小池氏の指摘通り、前者は武器に広く用いられた斜格子文様、後者は革綴じを表現したものとみてよいだろう。また鞘尻には赤彩が認められる。



写真5 大刀の断面(矢印部分)

また、先述した発見当時を記録した写真資料の中に、大刀の断面状態が写っているものがあり(写真5)、これにより中空で成形されていることが分かった。接合復元されて内面が分からなくなってしまったいま、製作技法を知ることができる貴重な資料である。

(4) 小結

以上の検討から、いくつかの新たな知見が得られた。まず、胎土や色調、焼成の特徴にくわえ、より詳しい出土状況が明らかになったことから、今回報告した人物埴輪と大刀が同一個体である可能性が高いことが指摘できた。また、人物埴輪の各部位にみられる粘土剥離痕は、本来は何らかの衣装をまとっていた可能性を示唆している。製作技法の点においても、人物埴輪の頭部と体部の接合や、胸部上半内部における粘土とじ合わせの痕跡が指摘でき、さらには大刀が中空で作られていることが分かったのは大きな成果といえる。

人物埴輪については、資料数の少なさや、形態・技法の複雑さゆえに、いまだ自立した編年観が確立していない現状にあり、人物埴輪のみが出土した大杉古墳の時期を考えるのは容易ではない。かつて小池氏は類例との型式学的差異から、5世紀後半以前という時期を割り出した。近年人物埴輪に表された大刀に注目して分析をおこなった大澤正吾氏の把頭分類に従えば、本例は楔形把頭Ⅲ形に最も近く、5世紀後半から6世紀前葉まで存在するという⁴⁾。限られた情報からではあるが、現状では5世紀後半～6世紀前葉と考えておきたい。

おわりに

本稿では、大杉古墳出土埴輪についてあらためて観察・実測をおこない、若干の検討をおこなった。墳丘がすでに消失し、ほかの遺物も見つかっていない現状においては、本資料が大杉古墳の唯一の情報源であり、今回あらためてその成果を報告した意義は大きいと考える。本稿で得られた知見が和東における古墳時代研究の進展に資することができれば幸いである。

謝辞

本調査にあたって、和東町史編さん室の皆さまに多大なご協力を頂いた。記して感謝の意を申し上げる。

註

- 1) 人物埴輪に付属せず、それ単体で製作される一般的な大刀形埴輪と区別するため、この名称を用いる。また、人物埴輪に付属している大刀形の埴輪については、厳密には大刀、刀、刀子など、いくつかの種類が含まれていたと考えられるが、ここでは一般的に多く呼称されている「大刀形」という名称を用いる。
- 2) 現在、和束町史編さん室が保管している文化財発見に関わる行政文書を特別に拝見させて頂いた。
- 3) 小池氏も、この表現に関して、「ベルト」（護拳帯）とともに、足金具と把縁としての案を提示する。ただし、前者は、佩表との位置関係に矛盾があること、後者も左ではなく右に佩けば位置関係に矛盾は生じないとしながらも、その形態からは積極的に支持できないとしている。
- 4) 大澤氏によれば、明確に把頭のいずれかを突出させる楔形把頭Ⅰ・Ⅱ形に関しては、楔形把頭大刀の模倣とし、これらに比べて鈍角に一方の辺を突出させるⅢ形に関しては、楔形把頭大刀もしくは頭椎大刀のいずれかを模倣していることを指摘している。なお、氏の分析対象は資料の多い群馬の埴輪を中心としていることには注意を要する。

参考文献

- 大澤正吾「人物埴輪の大刀表現に関する基礎的検討」『国宝 埴輪掛甲武人 重要文化財 埴輪 盛装女子 附 埴輪盛装男子』（東京国立博物館所蔵 重要考古資料学術調査報告書）東京国立博物館
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2020「和束町和束天満宮における考古学的調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2021「和束町坂尻古墳群の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2022「和束町坂尻古墳群の調査（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 小池寛 1994「人物埴輪から見た刀装具について＝京都府和束町・大杉古墳出土例を中心に＝」『京都考古』第74号 京都考古刊行会
- 鈴木康大・廣瀬寛・菱田哲郎 2021「和束町福塚古墳の埋葬施設と埴輪」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 塚田良道 2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
- 仲林篤史・溝口泰久「和束大杉の形象埴輪・須恵器提瓶の三次元写真計測結果」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 初村武寛「和束大杉の形象埴輪と須恵器提瓶の3D スキャンと出力」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 樋口隆康 1961「和束三本柿ノ塚古墳」『京都文化財調査報告』22 京都府教育委員会
- 菱田哲郎 2015「和束川流域の古墳」『和束地域の歴史と文化遺産』（京都府立大学文化遺産叢書 第9集）京都府立大学文学部歴史学科
- 菱田哲郎・田口裕貴「和束町二本一古墳出土の須恵器提瓶」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 和束町史編さん委員会 1995『和束町史』第1巻 和束町

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
